「退去の理由」

―初稿―

2025/02/28

しののめ　ののの

〈人物表〉

山田　太一　（28）　無職
幽霊

不動産屋の営業担当
霊媒師
隣人

職場の人（回想のみ）
元カノ（回想のみ）

〈ログライン〉

・人生に対して投げやりになっている山田が、新居で幽霊と出会い、活力を取り戻す話。

1.

ボロアパート・外観（昼）

アパート前に、不動産屋の社用車が停まっている。

2.

ボロアパート・空き部屋（昼）

山田太一（２８）と不動産屋の営業担当が、手狭なワンルームの内見をしている。

山田はどことなく投げやりな態度。

営業　「という訳でまあ、こんな感じですが……どうされます？」

山田　「……ここにします」

営業　「よろしいんですか？　……先ほどもお伝えしましたが、こちらいわゆる……いわくつき物件というやつですが」

山田　「別にどうでも良いんで……実際、何か起きるんですか？　怪奇現象とか」

営業　「その～、一応……誰も居ないはずなのに、物音とか話し声とかがするらしくて……他の部屋のかたも、気味が悪いからってどんどん引っ越しちゃって」

山田　「ふーん……誰か死んだんですか？　この部屋で」

営業　「……いやそれが……どなたも亡くなってないんですよね」

山田　「……え？」

3.

ボロアパート・山田家（夜）

山田、先日内見した部屋で引越し後の片づけをしている。荷物の中から職場の社員証が出てくる。

×　×　×

職場の人（回想）「……いやまあ、無断欠勤よりは良いんですけどねえ……無断出勤９５回っていうのは、流石に庇いきれなくて……契約は今回で終了ということで……」

×　×　×

山田、ため息をついて作業を再開すると、元カノとのツーショット写真が入った写真立ても出てくる。

×　×　×

元カノ（回想）「（号泣し）だって太一君、何回言ってもアボカドのことアボガドって言うじゃん！　もう出てってよ！」

×　×　×

山田、再度ため息をついてその場に寝転がる。
山田「元カノがアボガド警察ってなんだよ！　もう何でも良いわ。俺の人生どうにでもなれ～～」
山田の傍のスマホが突然起動し、謎の声が流れる。
謎の声「こらアカンわ」
山田「……え？」
謎の声「夢も希望もない若者。っか～～見てられへんわ～～」
突然、壁際に設置されたＴＶが点く。
賑やかなバラエティ番組が流れる。
山田「うわっ！　え！？　なんで！？」
山田、慌ててリモコンを手に取り、ＴＶを消す。
しかしすぐにまた点く。暫くの間、点けたり消したり、音量が上下したりの攻防が繰り広げられる。
山田、弾かれたようにシンクへ向かい、周辺の段ボールなどを次々と開けて必死に何かを探す。
食塩の袋を発見すると、自室へばら撒き始める。
山田「お、おい！　居んのか！？　おい！　これでどうだ！」
突然ＴＶ画面が謎のチャンネルに変わり、ラフな格好をした２０代の男だけが映し出される。
幽霊「それ意味ないで。もったいないことせんとき」
山田「うっうわあああ！！」
山田、ＴＶに向かって塩を大量に投げつける。
リモコンで再度ＴＶを消そうとするが、消せない。
山田「いやなんで！？　おい！」
幽霊「っかましいなぁ～～。ご近所さん迷惑やろ」
山田「え、ガチで！？　マジのガチで幽霊！？」
謎の声「せやけど？　やっぱＴＶはええなぁ～」
山田「え、あの、え……！？　あの、なんかのドッキリとかじゃなくて……！？」
幽霊「誰が引越し直後の新居に細工すんねん。名もなき孤独な庶民のくせに、自意識過剰も大概にせえよ」
部屋のスリッパが浮き上がり、山田の頭をはたく。
山田「うおっ！　えっ飛んできた……！？　マジか……！」
幽霊「せっかくここ数年は空き家やったのに。俺の快適な独り

身ライフを邪魔しよって」
山田「……お、おい！　ここはもはや俺んちなんだよ。こっから出てけよ！」
幽霊「先住人に対して何やねんその言い方。こっちにも健康で文化的な最低限度の生活を送る権利があんねん」
山田「ねぇよ！　お前に憲法で保障された人権は無い。大体、死んでるくせに健康がどうのこうの言うな！」
幽霊「うわあ……お前最低やな……お前に何が分かんねん……俺がどんだけ健康の有難みを噛み締めたことか……」
山田「え……ごめん」
　　気まずい空気が流れる。
山田「……なんで死んだの？」
幽霊「階段から落ちた」
山田「健康関係ねーじゃん！　病気かと思ったわ」
幽霊「うっさいなぁ～～。死んどることには変わりないやろ」
　　二人、暫く顔を見合わせた後、不意に笑い出す。
山田「あーもう、なんなのお前？　こんな幽霊見たことねーよ」
幽霊「他のタイプの幽霊は見たことあるんかいな」
山田「いやねーわ。とにかくお前出てけよ。もしくは家賃払え」
幽霊「払える訳ないやろ！　あ、でも……せや」
　　そこらに置かれている物件関係の書類が一枚、山田の手元に飛んでくる。
幽霊「賃貸用の家財保険、不動産屋が勧めてくるやつやなくて自分で適当に探して契約した方が安上がりやで」
山田「へえ～～……じゃなくて！　いや有難いけども」
幽霊「あと入居時の室内写真、できるだけ撮っときや。退去ん時に原状回復費請求しよるからなあいつら」
山田「謎に節約知識が凄いな……」
幽霊「まあ、心配せんとき。俺もうここ出てくから」
山田「え？」
幽霊「俺も静かに暮らしたいねん。ほな、お邪魔しました～」
山田「あっえ？　ちょっ……！」
　　ＴＶが消え、沈黙が訪れる。
山田「……え？　……マジで消えた？」

ＴＶを点けてザッピングするも、男の姿はない。
山田、虚空に向かって呼びかける。

山田　「……おーい？　……え、ほんとに？　ほんとに居ない？」
返答はなく、辺りに大量の塩だけが残っている。

山田　「……」

4.

ボロアパート・山田家（夜）

山田、胡散臭そうな霊媒師を自室に呼んでいる。

山田　「じゃあ、お願いします」

霊媒師「……承りました。（厳かに怪しげな呪文を唱え始める）」
突然ＴＶが点き、苦しむ幽霊の姿が映る。

幽霊　「痛い痛い痛い痛い！　ストップストップ！　やめ！　やめ……いやほんまに！　ガチのやつ！　フリとかそういうやつちゃうって！」

×　×　×

霊媒師は既に去っている。

山田　「やっぱり居座ってやがったか。出てくとか言ってたくせに」

幽霊　「なんでバレたんや。大人しゅうしよったのに」

山田　「お前みたいなタイプの関西人がほんとのこと言う訳ない」

幽霊　「エグい偏見を躊躇いなく開陳すなや」

山田　「なんでここに居座ってんの？　やっぱこの部屋で死んだから？」

幽霊　「階段から落ちた言うたやろ。ここでは死んでへん」

山田　「じゃあ何？　この部屋に住んでたとか？　あっ階段って、このアパートの外階段とか？」

幽霊　「いや全然、１ミリも関係あらへん。生きとる時にこのアパート来たこと一回もない」

山田　「じゃあなんでだよ。　なんでこの部屋に１ミリも関係ない幽霊がここにいんだよ」

幽霊　「……もち米ポコポコピーズって知っとる？」

山田　「もち……え？」

幽霊　「もち米ポコポコピーズ。漫才師の」

山田　「知らね～～～～～。ガチで一回も聞いたことない」

幽霊　「はあ……これやから関東人は……」
山田　「それが何なんだよ。もち米なんとかが、なに？」
幽霊　「俺がめっちゃ好きな芸人さんやってん。ツッコミの人がな、この部屋に住んどってん。解散して地元帰りはったから、引っ越してもうたけど」
山田　「……え？」
幽霊　「え？」
山田　「……からの？」
幽霊　「……終わりやけど」
山田　「……そういうのアリなの？　そんな、聖地巡礼みたいな感じで地縛霊とかなれんの？」
幽霊　「別に地縛霊ってほど大層なモンちゃうけど。この部屋住んどったらおもろなれそうやなって」
山田　「……お前も目指してたの？　芸人」
幽霊　「せやねん。もうちょいで売れそうやってんで！　……結局、ＴＶには出れんかったけどな」
山田　「へえ～～……俺も目指そっかな～～」
幽霊　「舐めとんちゃうぞ！　俺と喋って決意されんのめっちゃ腹立つわ」
山田　「え、どうやったらなれんの？　やっぱまずは養成所とか？　ネタってどうやって書くの？」
幽霊　「え……？　ほんまに言うてる？」

不意にインターホンが鳴る。
山田、幽霊と顔を見合わせてから玄関へ向かう。

山田　「（ドアを開けて）……はい」
隣人　「あ……夜分にすみません。あの、隣の部屋に住んでる者なんですけど……」
山田　「あ、どうも……」
隣人　「その……今って、どなたかいらっしゃってますか……？」
山田　「え？　……いや、僕一人ですけど……」
隣人　「本当ですか……？　その、話し声が聞こえて……結構大きい声で……」
山田　「あーー……えっと……いや、誰とも話してないです……」

おわり